



亀山正邦

住友病院院長

この20年は、一種の情報革命ともいえるべき激動の時代でした。当図書室協議会が、近畿地区のみならず、近畿外、病院外施設を含めて、会員数102機関のゆるぎない組織に発達したことは、何よりも大きな喜びです。関係各位の御努力と誠意に深く感謝いたします。

私は、過去40年以上、医学中央雑誌（医中誌と略）の編集や校正などに関与して参りました。現在でも毎週、邦文論文100篇には目を通し、抄録内容に朱筆を加えております。私はかつて、東京の浴風会病院におりました。その院長は尼子富士郎先生で、日本の「老年医学」の、文学通りのパイオニアです。先生の父君（尼子士郎先生）が、ドイツのZentralblatt にならって、「医学中央雑誌」を、私費で発刊されました。士郎先生は、東京で夏目漱石宅と近かったらしく、漱石の日記を読むと、士郎先生のことが時々出てきます。いろいろ、御病気の相談にあずかっておられたのでしょうか。医中誌は、初めは投稿論文を掲載する形式でしたが、やがて抄録誌に変わって行きます。富士郎先生は子供のころ、漱石に英語を習われたそうです。私が初めて尼子富士郎先生にお会いしたころは、まだ、東京には戦後の焼跡がたくさん残っていました。浴風会病院で診察したり研究したり、楽しい時代でした。尼子先生は、よく、若い者を集めては、当時としては珍しいすばらしい御馳走をして下さいました。医中誌の編集に

は力を入れられ、私どもも、その御手伝いをさせて頂きました。それが今日まで続いているのです。論文の essence を汲みとって、それをできるだけ簡潔に表現する—その努力は決して無駄ではなかったと思います。当時の浴風会病院には、世界中の「抄録誌」が置いてありました。見よう見まねで、抄録の方法を覚えたりしたものです。また、尼子先生もことに表現には厳しく注意されました。病院の図書室には、「老」に関する世界中の文献が集められておりました。何よりも壮観なのは、医中誌が全巻揃っていたことです。私が日本で初めて「側頭動脈炎」を報告したとき、その便利さに感心いたしました。しかし、今のように医中誌CD-ROMの時代からみれば、おとぎ話のようなものかもしれません。

ヒトの脳が動物に比べて最もすぐれているのは、図書館や博物館など、情報の蓄積を脳以外のところにもっていることです。それをいかにうまく使うか。医学における情報の価値を考慮すれば、さらに、その設備、運営、向上・発展に多くの予算を注入してもよい筈です。将来は、「医学図書サービス保険」というような任意加入の「保険」ができれば、などと考えたりします。

貴協議会の一層の御発展を祈念してやみません。